

# 英文多読による個別自律学習の指導

(豊田工業高等専門学校) 吉岡 貴芳, 西澤 一

## 1. はじめに

英語のリーディング力を伸ばすために多量に英文を読む「多読」を、以下に示すような指導方法に基づき、専門科目としての英語授業で実践した。

- 1) それぞれの学生の興味や関心にあった教材として Graded Readers や児童書を多数用意する。
- 2) 個々の学生の英語力にあった教材を薦める。
- 3) 学習者が自分の英語力にあった教材を自ら選択できるように導く。

## 2. 背景

実社会において高専卒業生達は、様々な英語技術文書の読解に日常的に携わっている。しかし、彼らの英語運用能力の不足により、業務実行に困難な状況が少なくなかった。筆者らは、その理由のひとつとして、専門分野に関する(工業)英語語彙力の不足を挙げ、報告してきた<sup>1,2)</sup>。しかし、語彙力だけでなく、高等学校と比較して授業時間数が少ないことや、もともと高専の学生は英語学習を軽視する傾向があり高校生のように大学入試試験もないため、教科書以外の大量の英文に接する機会がほとんどない。本校でも、通常の英語講読や文法・文作の授業に加え、「科学基礎英語(第3学年)」および「科学英語基礎(第4学年)」が授業として導入され、様々な科学技術に関するトピックを題材としたリーディング学習がなされているが、読書量の不足が指摘されている。

第二外国語学習の研究者であり心理学者である Krashen は、第二外国語修得において大量の文章を読むこと「多読(Extensive Reading)」だけが第

二言語修得においての有効策であるとする“Natural Approach”を発表している<sup>4,5)</sup>。また、アメリカの大学では外国人の ESL 用に多読を実施しているところがあると聞く。しかし、このような多読には、当然大量の英文が必要であることや、日本で行われてきた従来の英語学習である精読(Intensive Reading)とは異なった授業形態が必要であることなどから、これまで実際の授業ではあまり行われてこなかったが、教授法に閉塞感を持つ教師達が、近年多読を実際の授業において実践してきており、電気通信大学等(後述の SSS Web サイト参照)にて着実に成果を出しつつある。

筆者らは、多読を大学や高校の授業などで行っている教育者、特に電気通信大学の酒井邦秀助教授<sup>7)</sup>および学習塾「科学的教育グループ」の英語学習法研究会「SSS」<sup>8)</sup>からの助言を得て、英語のリーディング力を伸ばすために英文多読を実際に授業で実践し、学生が自らの能力を伸ばすために自律的な英文学習の指導を行ったので報告する。

## 3. 指導方法と授業状況

### 3.1 授業概要

多読を行った授業の概要について以下に示す。

#### 授業概要

---

科目：電気技術英語 B(専門科目) H14 年度後期  
学生：電気工学科 5 年生(男子 36 名, 女子 3 名)  
および情報工学科(男子 3 名) 計 42 名。  
期間：10 月初旬～1 月末, 全 13 回(週 1 回)  
教材：使用語彙数, 文法, 語数, 1 ページあたりの文の数, 挿絵などによって数段階にレベ

ル分けされた Graded Readers という様々な内容の本約 350 冊 .

Penguin Readers , Oxford Book Worms Library など ( 1 冊約 15 ページ程度 )

その他児童書および , Oxford Reading Tree 約 250 冊 .

提出物 : 読書リストと読書の状況のみを書いたノートを毎週授業後に提出 . また , 読んだ本の表紙の裏に一行感想 ( 記名なし ) を書かせたが , 評価の対象とはしていない .

( 翌週までにノートにアドバイスを書き込み , 返却する際に個別に本を選択するためのアドバイスを直接行った . )

---

授業時間の 90 分だけでは , 読書量として不足であるため , 家庭や寮 , 通学途中でも読めるように , 3 冊程度の本の持ち帰りを促した . ライブラリは図書館には置かず , 筆者の研究室にて管理し , 本を借りに来る学生の進捗を個別に把握したり , 本の選択についてアドバイスしたりした .

### 3.2 指導方法の詳細

以下に示す指導方法の詳細については前述の酒井氏および SSS の指導方法に従って行った .

多読はこれまでの目標達成型の授業や , 学生に知識不足の危機感をいだかせて動機付けする授業とは全く異なる授業方法であると考えた . そのため , 学習者の能動的な多読活動を助ける動機付けやアドバイスが必要である . 第 1 回目のガイダンスでは「好きな本を好きなだけ読む」「Penguin Readers Level2 を目標とするが , 強制ではない」と指導した . また , 無理してレベルを上げるよりも , 自分が楽に読める程度のレベルを大量に読んで , 日本語に訳さずにとらすと読めることを目標にするようにと指導した . ここでとらすとは , 酒井氏の著書によれば「1 分間に 100 語以上ならば OK , 70 語以下ならば本をやさしいレベルのものに替える」としている<sup>7)</sup> .

大量の文章を読ませるために , 読む本を学生に選ばせ , 学生が英文を辞書なしである程度の速さで読むことができるようになるまでは , 教授側が個々の学生のレベルに合った難易度 ( 語彙数および使用文法の制限 ) の本を読むように指導した ( というよりは “ 薦める ” ) . また , 知りたい , 面白いといった心理的な障壁のない ( Krashen による “ Low Affective filter hypothesis ” ) ことが , 大量の文書に接するために前提条件となるため , つまらないと思う本はすぐにやめるよう指導した . つまらない本をいつまでも読んでいると , 本を読むことそのものがつまらないと感じてしまいかねないからである . ここで “ つまらない本 ” とは個人の価値観に依存するため , 物語 , ノンフィクション , サイエンス , 伝記 , ミステリーなど様々な種類の本を準備しておいた . 英文和訳による読解をさせないよう辞書を使わず , 分からない単語はとばして , 内容が 7 割程度わかれば良いとした .

### 3.3 授業状況

授業での指導では , 個々の学生に対し , 自身で快適なスピードと理解度で読み進めることのできる本を薦めたり , そのような本を探すことの支援したりすることに費やした . これは単なる学習者の自習的な読書活動を単に監視しているだけではない . このような指導を継続している理由は , 授業とは別に筆者が個別指導していた数名の学生が , 適切なレベルを見つける前に読むことを放棄してしまったことがあったからである .

ほとんどの学生は Penguin Readers の Easy starts というレベル ( 全語数約 200 ) からスタートした . 学生は , どのレベルを読んでよいか分からず , 「読んでいると疲れる」といった感想をノートに記していた . そこで , 学生に対して , 読むスピードが上がらず , 日本語訳をしているようであれば , そのとき読んでいるレベルよりもやさしいレベル ( 例えば , Penguin Young Reader の Level1 や 2 ) に一度レベルを下げて , 学生が快適なスピ

ード(前述の1分間で100語程度)と理解度で読める本を読むよう指導した。単なる自習では、学生自身が、自分が快適に読むことのできる本のレベルを自分で見つけることが難しいが、授業において筆者が指導をすることで学生がアドバイスを元に試行錯誤的にある時点で適切なレベルの本を探すことが徐々にできるようになっていった。

授業を始めて4, 5週目くらい経っても学生の読む本のレベルがなかなかあがらなかったが、多くの学生が7週目でPenguin Reader Level 1にあがった。また、授業外に本を頻りに借りに来る学生は数名が週1回づつ程度であり、通学途中では集中ができず、課外時間は卒業研究等で忙しく、自宅では集中ができないなどの理由で、なかなか読書時間を確保ができないようであった。

学生が提出した読書ノートをチェックしていて、「本のレベルを上げたがスピードがでない」文章が長いと疲れる」といったコメントがあった。これらには、2つのレベルの本を交互に読むことを指導した。なお、日本語でも本を良く読むリテラシ能力の高い学習者は英文多読でも本のレベルの上昇も早く、文章量の多い本や全く知らない内容の本でも読み進めることができるようであった。ただし、このことは数名のデータでしかないので一般的な知見ではない。また、男子学生はノンフィクションものを好み、女子学生は物語を好む傾向にあるようであった。

一方で、レベル上昇の遅い学習者は既知の内容の物語等を好む。そのような学生には、Oxford Reading Tree という超初級学習者用の本を勧めた。20歳程度の学生であっても、Stage 4,5 くらいからのスタートがちょうど良いようであった。

最終的にPenguin ReaderのLevel 2に到達した学生は、42名中の数名程度であった。最も良く本を読んだ学生のうちの一人は、ページ数にして約1100ページを約3か月間で読み、総語数が約10万語であった。このことは、当初予定していた達成度よりも低いものであったが、これは授業期間が後期のみで卒業研究が追い込みの時期であっ

たことや、テスト期間や冬休み等を除けば実質的に3か月程度と短かったことが原因であるといえる。ただ、ほとんどすべての学生が自分のレベルにあった難易度や内容の本を自分の力で選択することができるようになり、自律的な学習を指導することの目的は達成した。

### 3.4 評価

半期の多読授業によるリーディング能力の向上を評価するために、CLOZEテストを行った。CLOZEテストとは、文章中の単語をある機械的な規則(10語おきや7語おき)で空欄としておき、解答者には空欄に当てはまる単語を書かせたり、選択肢から選ばせたりして、文章を完成させるテストである。今回は、国際テンプル大学のメイソン紅子氏らが作成したA4 2枚、約2000語の文章において、100個空欄(今回は10語おき)をそれぞれ4単語の選択肢から適切な単語を選ばせるCLOZEテストを用いた。テストの文章背景は、日本語でならば誰でも知っているようなものであり、レベル的には、多読の本では最初のステップアップのPenguin Reader Level 1程度のものであり、量的には同レベルの本2冊程度である。授業初日と最終日とでこの同じCLOZEテストを用い、解答数および正解数と、それらの伸びを測定した。テスト時間は授業の都合により通常1時間のところを、30分として行ったため、全ての解答をこなすことのできた学生は2,3名のみであったが、伸びを測定するため事前のテストで正解数が50%未満であればテストとして利用できるため、問題はなかったといえる。なお、事前テストを10月の初旬の第1回目の授業の際に行い、その後解答を配布したりせず問題用紙も回収し、事後テストを約4か月後の1月下旬に行ったため、同じテスト問題を使ったとしても、慣れによるテスト効果は考慮せずとも良いと考えた。

CLOZEテストの結果、解答数の伸び(事後テストの解答数から、事前テストの回答数を引いた数)

と正解数の伸びの両方が0以上であった学生に対し解答数の伸びの割合をもとにグループ分けした。

表 1. 事後テストによるグループ分け

グループ	解答数の伸びの割合	人数
A	40%以上	4
B	10%以上 40%未満	5
C	0%以上 10%未満	4

なお、グループ A には、解答数の伸びの割合が 95% 以上の学生がおり、この学生を A1 学生と呼ぶ。この学生はリーディングに対するモチベーションアンケート<sup>10)</sup>において、35 ポイント中 20 ポイント（表 1 の学生の平均は 8.9、標準偏差は 5.0）と高得点であった。

グループ別の平均読書量（読書ページ数）は、A グループが A1 を除けば平均 1250 ページ（A1 を含めれば 1040 ページ）、グループ B は 1000 ページ、グループ C は 1010 ページとなり、読書量と解答数の伸びの割合とは関係がないようにみえる。また、多読の実施前に行った TOEIC のリーディングセクションの平均点は、それぞれ、グループ A が 42.3 点（標準偏差は 11、ただし A1 は A グループで最高点の 55 点）、グループ B が 47 点（標準偏差は 13.3、最高点 67 点、最低点 35 点）、グループ C が 42.8 点（標準偏差は 4.8 点、最高点 47 点、最低点 38 点）であり、CLOZE テストにより解答数が増えた、すなわち文章を読んでいくスピードが上がったことが、読書量やもともとの英語能力に依存しないことが分かった。

ここで、全体の読書量だけでなく、具体的に読んだ本のレベル別に見てみると、グループ A の A1 を除く学生や、グループ B の学生の多くは、授業の期間の前半から後半 3/4 までは、比較的レベルの低い初級レベルの本（Penguin Readers Level 0 や、Penguin Young Readers）を、大量に読んでいたことが分かった。例えば表 2（ここでは、まだ授業の期途中である）の学生は、全読書量 1171

ページのうち、912 ページは初級の本の読書によるもの（約 78%）であった。また、グループ A のある学生は、初級の本の全読書量 1767 ページのうち、初級が 942 ページ、超初級が 800 ページであり、ほぼ全ての時間が初級の本の読書に費やされていたことが分かった。一方で、グループ C の学生らが読んだ初級本の割合は、平均 58%（標準偏差 13%）であった。これらのことから、わからない単語をある程度気にせずに流暢に読んでいくためには、まず、単語や構文がそれほど難しくない平易な英文を大量に読むトレーニングを行うことが、学生にとっては必要なことではないか、との示唆がえられた。

### 3.5 課題

授業の達成度を多読では明示しにくいと思われるが、「何語程度の本を何分間で読める」という尺度の導入や、初出問題による読解力テスト、ACE（英語運用能力評価協会）または TOEIC などによる外部評価を取り入れていく。平成 14 年度の授業では、外部試験による客観的な評価は、時間の都合でできなかったが、平成 15 年度の授業では、既に ACE を用いた Pretest を終えている。機会があれば、ACE による評価結果を報告したい。

詳細な報告は、平成 15 年度高専教育に投稿予定である。

### 参考文献

- 1) 吉岡, 西澤, 工業英単語教育の授業への組み込みとその教育効果, 平成 14 年度高専教育講演論文集, pp.97-100(2002) .
- 2) Stephen D. Krashen, Tracy D. Terrell, The Natural Approach, Prentice Hall (1988).
- 3) 酒井邦秀, 快読 100 万語! ペーパーバックへの道, ちくま学芸文庫 (2002).
- 4) 英語学習研究会 SSS , <http://www.seq.co.jp/sss/>